

『薔薇物語』 論争初期の争点とは

—— ジャン・ド・モントルイユ対クリスチーナ・ド・ピザン ——

横 山 安 由 美

論争を呼ぶ論争

『薔薇物語¹⁾』は13世紀に書かれた寓意文学の傑作で、前半はギヨーム・ド・ロリスが(1230年頃)、後半はジャン・ド・マン(以下、「J・ド・マン」)が(1270年頃)執筆し、とくに後半は17722行という長さを誇る長大な韻文作品である。〈わたし〉が〈薔薇の蕾〉に恋をして、その恋を实らせるまでの過程を〈歓待〉や〈嫉妬〉などの多数の擬人化された形象と共に描く。断片写本も含めると三百近い写本が残存することからも当時たいへんな人気を博した作品であることがわかる。

しかしながら1400年頃に同作について賛否両論が巻き起こり、これが後に『薔薇物語』論争と呼ばれることになった。『薔薇物語』擁護派としては国王秘書官のジャン・ド・モントルイユ、コル兄弟など、反対派としてはクリスチーナ・ド・ピザンや神学者ジャン・ジェルソン(以下、「J・ジェルソン」)らの名前が挙がり、1405年頃まで続いた。当事者たちの書簡や小論はラテン語またはフランス語で書かれ、それはイックスの校訂本や英語・仏語の翻訳本など²⁾にまとめられてるが、その数は数十点に及ぶ。資料の中心が書簡であるために、制作時期や送付対象が不明なものも多く、私的な状況等未解明の要素が多分に残る。しかし本稿では論争資料の文献学上の問題には立ち入らず、イックス版をそのまま使用することとする。

とりわけこの論争を通して名を知られたのが女流詩人のクリスチーナである。女性の立場を擁護したことから論争は「最初の女性論争」と呼ばれることもある。『薔薇物語』の構造自体が女性をモノとして対象化し攻略するためのマニュアル的性質を有していたり、とりわけJ・ド・マンによる後半部分に女性蔑視の言説が多数含まれていたからだ。他方で、文学の目的、作家の責任、虚構と現実の区別などといった争点もこの過程から浮かび上がるため、本論争を「最初の文学論争」として重視する研究者も少

なくない³⁾。

そもそも論争に対する解釈は『薔薇物語』に対する解釈に呼応する側面があり、ひとつに収束することはない。論点も多岐に渡り、しかもそれが絡み合っている。1400年頃の論争を巡って現代でもさらに「論争」が続いていると言うことができるだろう。ヴィルジニ・グリーンは論争の解釈史を三段階に分けてまとめている⁴⁾。第一段階はユマニズム的視点によるものであり、ガストン・パリスやギュスターヴ・ランソンといった19世紀末から20世紀にかけての文学史を牽引した大学者たちが古典古代の教養に通じた擁護派ジャン・ド・モントルイユやコル兄弟を「ユマニストの先駆け」として高く評価した。『薔薇物語』後半の著者J・ド・マンもまた主知主義的な精神や百科全書的知識によって同様に賞賛された。ホイジンガも「その完全な異教性において」同書は「ルネサンスへの第一歩」であると記している⁵⁾。一方でエチエンヌ・ジルソンの弟子のアンドレ・コンブ神父は、神学と文学の両方に通じたJ・ジェルソンの中にこそ真の教養人やユマニスト像を見るべきであると反論する⁶⁾。

第二段階は1960年代のアメリカを舞台とする。プリンストン大学のD.W.ロバートソンやその弟子がJ・ド・マンをチャーサーやラブレーに並ぶ偉大な作家と位置付け、卑猥な記述もまた、理性の声に従い、自らの欲望を克服するための賢明な助言であると捉えた。ポリティカル・コレクトネスが要求される現代の制約に満ちた言論界と比べて、J・ド・マンの自由闊達な記述はまさに「表現の自由」の黄金時代だったというわけだ。そこに大いなるノスタルジーを感じるロバートソンに言わせると、J・ジェルソンは古臭い説教坊主であり、クリスチーナは「ひとりの怒り狂った女」(an irate woman)⁷⁾でしかない。批判的な女性をフロイト的ヒステリーの症例と見なす男性的偏見は現代においても残っている。他方ベアードとケーンは両陣営にそれぞれ長所・短所があることを指摘しつつ、多くの読者の用に供するために論争書簡の英訳を刊行し、アメリカでの論争研究を活発化させる。

第三段階は女性学の理論が進歩した現在をも含む時代である。J・ド・マンの男性的感覚をどのように近代の理論と絡めていくのかが課題となる。たとえばポルノグラフィー問題に取り組んだキャサリン・マッキノン は、事実が虚構を作るのではなく虚構が事実を作る、つまり性的な想像物が現実の性的実践を作ることを指摘したことで有名だが、その観点からすれば『薔薇物語』のファロス中心主義は虚構や登場人物のセリフ内だから

とって無制限に許容されるわけではない。論争を考えるには、社会や後世に対する影響、当事者一人ひとりの意図や結果など、総合的に考察する必要があるとグリーンは述べている。「誰と、何について、どのように、論争を行うのか？なぜ論争するのか？論争が何の役に立つのか？」⁸⁾。

日本での『薔薇物語』論争研究は数少ないが、月村辰雄、木間瀬精三らの貴重な研究が存するので、詳細はこれらを参照されたい⁹⁾。ただし1958年発表の木間瀬論文はテキスト制作の時系列を無視している点と、肯定的とはいえ、クリスチヌを〈女性〉の型にはめて解釈しているという点は遺憾である。論文では「彼女ほど飽くまでも女性的な詩人は、いつの時代にあっても稀にしか見出されないものである¹⁰⁾」という文言が繰り返される。クリスチヌは「女性的」であるが、このように「女性的な女性は稀である」と言うときの「女性」とは、いったい何なのだろうか。それは男性視線が作った虚構ではないのだろうか。ことさらにクリスチヌを「例外」として賞賛することは、あたかも『薔薇物語』が貞淑な女性を探すのは「フェニックス」や「黒い白鳥」を探すのと同じくらい難しい¹¹⁾と述べて女性蔑視につなげたのと同趣旨になりかねない。「女性の理想化」と「女性蔑視」は伝統的な女性表現の主要な二つのかたちであり、その二つは実は同一軸上にある。

このように本論争は論者の先入観が多分に解釈に影響する分野である。本稿ではいったんこうしたジェンダーイデオロギーから離れ、論争初期の具体的な書簡の文言にあたって現実の相を浮き彫りにし、論争の発端や争点について少しばかり考えてみたい。

論争の発端とジャン・ド・モントルイユ書簡

前述の「怒り狂った女」という形容を見る限り、あたかも『薔薇物語』を読んだクリスチヌ・ド・ピザン(Christine de Pisan, 1365頃-1430)が内容に憤慨して論争を始めたかのような印象を受ける。木間瀬も「その〔論争の〕口火を切ったのが、婦人の名誉に加えられる余にも激しい侮辱に耐えかねて、敢然と女性侮辱者に挑戦した女流詩人¹²⁾」クリスチヌであると述べている。実際1399年に発表された彼女の『愛神の書簡』*Epistre au Dieu d'Amours*を論争の発端と見なす研究は少なくない¹³⁾。しかし同作品は他の多くの論争書簡が発表された1401年の二年も前のもので、5月1日の「恋人の日」に発表された、愛神が正しい愛のあり方を説く827行の韻文詩である。関連箇所は20行程度で、恋愛技法を教えるオ

ウィディウスの『恋愛指南¹⁴⁾』のような書物を用いても本当の愛に至ることはできず、なによりも恋人の正直さや誠実さが必要だという趣旨だ。

この本〔『恋愛指南』〕に従って行動する男は、どれほど愛されていようと、自分が愛することはないでしょう。ですからこの本の題名は間違っています、それは「大いなる誑かしと偽りの見せかけの技の本」(livre d'Art de grant decevance et de fausse apparence) だからです。そのように呼んでやりましょう (vv.374-378)¹⁵⁾。

後に追放の憂き目にあったオウィディウスや『薔薇物語』のジャン・ド・マンのような、あれほど優れた詩人ですら、なんとくだくだしい！なんと骨折りの仕事！彼は明らかな知識も難解な知識も盛り込み、大仰な〔恋の〕冒険を描いた！その目的はと言えば、縋ったり懇願したり、手練手管を用いたり、詐欺や悪知恵によって、ただ小娘ひとりを騙すため！か弱い砦に果たしてこんな大掛かりの攻撃が必要なのだろうか（下線筆者、以下同、vv.386-396）。

オウィディウスは中世で最も知られた古典古代の作者で、強い影響力をもった。そこにJ・ド・マンへの一過的な言及が加えられただけである。彼女の批判の対象は恋愛のマニュアル化や恋人の嘘や不誠実な振る舞いであって、J・ド・マンの女性蔑視ではないし、いわんや何か論争を意図している書き方でもない。イックスが言うように、本作品を論争の発端と取るには無理があるだろう¹⁶⁾。仮にクリスチヌスが『薔薇物語』を読んで「論争」をしたくなるほど立腹したとしても、その場合は1399年よりも前に意思表示をしたことだろう。

論争の火蓋を切ったのはむしろジャン・ド・モントルイユ (Jean de Montreuil, 1354-1418, 以下「ジャン¹⁷⁾」) だと考えられる。彼はリルの司教聖堂参事会頭であるとともに国王秘書官の立場にあり、同職にあったゴンチエ・コルとピエール・コルの兄弟とも親しく、宮廷で一種の文学サークルを形成していた。論争初期書簡を時系列を並べると下記のようになり、大半はラテン語で記述されている。書簡番号や説明はイックス版に拠る¹⁸⁾。残存している最初期の103書簡から見ていこう。

1) 1401年4月

ジャンが『薔薇物語』を読む

2) 1401年5月

ジャンが仏語で小論執筆（テキスト不

- | | |
|------------------|-------------------------------|
| | 明) |
| 3) 1401年5月半ば～末 | 「著名な聖職者」とクリスチーナに小論を送付 |
| 4) 1401年5月末 | ジャンがピエール・ダイイに小論と書簡 [103] を送付 |
| 5) 1401年6-7月 | クリスチーナがジャンに「小論への返事」[V] を送付 |
| 6) 1401年7月末か8月初頭 | ジャンが「ある法曹家」宛に書簡 [118] を送付 |
| 7) 1401年同 | ジャンが「高位聖職者」に小論と書簡 [119] を送付 |
| 8) 1401年同 | ジャンがゴンチエ・コルに救援要請の書簡 [120] を送付 |

ただし書簡の性質上、細かい文脈や厳密な指示対象がわからない箇所が多々あり、しかもジャンのラテン語の文体は「難解で不明瞭」(crabbed and opaque)である。ベアードの英訳の序文では、コヴィルやホイジンガを初めとする従来の訳文には多くの誤謬があり、その積み重ねが正当な解釈を妨げた事情が付記されている¹⁹⁾。拙訳もあくまで当時の様相を概括的に理解するための暫定的なものであることをあらかじめ断っておきたい。

書簡 [103] [ジャンからピエール・ダイイへ]

我が敬愛する神父殿、我々の仕事を超えることや反することを行って誹りを受けることは望みませんが、他に書くこともない状況で、いわば新機軸を探しておりましたところ、つい先ごろゴンチエ殿が私に『薔薇物語』を読むよう勧めて——というかむしろ嘆願して——くれましたので、取り急ぎ、かつ貪るように読み、勢いのままにフランス語で著者の才能について小論を書き記しました。それを本状に添付いたしますので、敬愛してやまない神父殿、どうぞご覧ください。

ですから我が師よ、私が著者を賛美したことはやり過ぎだったのか不足だったのか、あるいは中庸を得ていたのかの判断は貴殿に委ねたく存じます (Hicks, p. 28).

ピエール・ダイイは教会大分裂の終焉に貢献した著名な神学者である。下

親部「著者の才能」(actoris ingenium)の「著者」は単数形であり、後半のJ・ド・マンを指す。『薔薇物語』は著名な作品であるにもかかわらず1401年の時点でジャンは未読だったが、4月にゴンチエ・コルの勧めで読み、すっかり魅了された。そればかりでなく同書についての小論をフランス語で書き、5月から8月にかけて、書状を添えて複数の人間に送付した。残念ながらその小論の本体は失われているため、引用や返信から推測することしかできない。なお後に引用するように、クリスチーナはその小論を受領しているものの、小論の名宛人は別の人物である。小論は当時の著名な知識人たちに送られたようだが、必ずしも好意的に受容されなかったことが次の書簡からわかる。

書簡 [118] [ジャンからある法曹家へ]

極めて慧眼の貴殿よ、ジャン・ド・マン師の書かれたこの深遠なる作品にして顕著な記憶における神秘の高適さと高適さの神秘を私が求めれば求めるほど、作り手の才能がより明確に見えてきます。ですから、(最大限健全な判断に基づいて、案件について慎重かつ熟慮のうえ判断を示すべき場である)民事訴訟に毎日携わっておられる貴殿よ、そのあなたが、何の働きかけからか、はたまた気まぐれからか、この極めて能弁で極めて学識のある作家がふざけ半分または下手糞に、過度に軽率に書いたと判断されるに至ったことについて、私は大きな驚きとともに訝しんでいる次第です。あたかも裁判所で案件を審議するかのように、貴殿はおととい死者に対して言いがかりをつけたのですから。(Hicks, p. 28)

この「ある法曹家」の名前は不明だが、おそらくジャンの小論を読んで否定的な回答を返したのだろう。J・ド・マンの書きぶりを「ふざけ半分または下手糞に、過度に軽率に」(leviter nimis, scurriliterve aut inepte)だと判断し、ジャン・ド・モントルイユを憤慨させている。法曹家の回答と、後述するクリスチーナの回答の先後関係は不明だが、いずれも6月から7月頃にかけて独立して書かれたと考えられる。また当該の法曹家本人に対してジャンは、貴殿は「死者 [= J・ド・マン] に対して言いがかりをつけた」(contra mortuum verba faciens)と書いているが、それこそ「言いがかり」というものだろう。旗色の悪化に危惧したジャンは朋友ゴンチエ・コルに宛てて次のように書く。

書簡 [120] [ジャンからゴンチエ・コルへ]

極めて思慮深い師にして兄弟である貴殿よ、ほかならぬあなたの勧めと嘆願によって、例の『薔薇物語』と呼ばれるジャン・ド・マン師の高貴な作品を私が読んだのはご存じですね。彼の技巧と才能と学識のすばらしさについては私は貴殿と同意見ですが——その信念において揺らぐことはないかと断言します——少なからぬ権威のある複数の学僧たちによって、あなたのご想像を超えるほどに、私はひどい扱いを受け、悪しざまに言われますので、彼らが言うには、これ以上私が彼を擁護しようものなら完全に異端扱いされかねない様子です。言うまでもなく、貴殿や他の立派な学識ある方々は、本書はたいへん価値があるので、まるでこの本なしで過ごすくらいならシャツなしで過ごす方がましだといわんばかりに伏し拝むような調子です。しかも彼の敵たちは […] あまりに強力なので、何らかの難点があろうものなら彼の本は一時間たりとも生き残ることができないほどです。 […] 少しでも唇を動かそうとすれば、彼らは私の言葉をただちに遮り、中断します。ほとんど死罪に値するかのような調子で、破門の恥辱によって私を脅すのですから。

いったい私は何を言えばよいというのでしょうか (Hicks, p. 32).

「伏し拝むような調子」 pene ut colerent, 「この本なしで過ごすくらいならシャツなしで過ごす方がまし」 utque quam eo carere mallent camisa の文言から、ゴンチエや他の擁護派たちの『薔薇物語』への熱中ぶりがよくわかる。そしてジャンは『薔薇物語』を勧めたゴンチエに責任があるといわんばかりに論争への助力を求め、擁護派を集結させようとする。他方で、皆が心酔しているのに自分だけが矢面に立たされ、批判を受けていることへの不満もそこはかとなく醸し出している。「異端」「死罪」「破門」といった語彙を用いて不当な迫害を強調する書きぶりは、無実でありながら魔女狩りの対象になってしまったといわんばかりのジャンの強い被害者意識と、その裏腹の関係にある、ひとり勇敢に戦う男のヒロイズムであろうか。当時の知識人の多くは聖職者であるため、J・ジェルソンのような道徳心の強い教会人から批判を受けることはあったとしても、せいぜい下世話な世俗作品を擁護しただけで教会の「組織的な」迫害の対象になるとは考えられないからだ。

宮廷知識人たちの親密なサークルはホモソーシャル²⁰⁾な集団と捉えることができる。彼らは〈女〉という共通の欲望や侮蔑の対象をもち、それゆえに、ときには仕事を放り出してまで²¹⁾J・ド・マン的ミソジニーに興

じるわけだが、実はセジウィックの言うとおりの、女のこと以上に互いが互いを気にかけている。ジャンは国王秘書官という高位の立場にいて自由に執筆を行いながらも他人の評価を大変気にしていることは [103] 書簡でピエールに「やり過ぎ」(nimium) なのか否か問うている部分からもわかる。

また表現の自由についての捉え方も面白い。権威や保守的な道徳に屈しない J・ド・マンの奔放な文章を賞賛する一方で、自分で論戦を張っておきながらも相手方の反論を一切許容できず、むしろ相手方が自分の口を封じようとしていると解釈する。自分の言動が批判されたとき、「そのようにあら捜しをされたら、もう何も言えなくなってしまう。いったい何を言ったらいいんだ。このままではギスギスした社会になってしまう」と言うハラッサーは少なくないのだが、「いったい私は何を言えばよいのでしょうか」(Quid vis dicam?) というジャンの文言は同じ構図を示すように感じられる。

論争の約百年前に没した J・ド・マンを彼らが直接知るはずがない。いわば「死者」[118] を発掘してダンテのような大作家として権威づけをしたかったのだろう。「著者の才能」[103], 「この極めて能弁で極めて学識のある作家」[118], 「彼の技巧と才能と学識のすばらしさ」[120] などの文言を見ても、『薔薇物語』という作品よりも J・ド・マンという人格の賞賛に重点が置かれていることが明らかだ。前半部分の作者ギョーム・ド・ロリスの名は出てこない。本論争以前にもウェルギリウスとオウィディウスの評価を巡ってジャンやコルたちの中で論争があったのだが、「しかし、古代作家の名を列挙し大げさな賛辞をならべただけで、作品の内容には一切言及しようとしないうその書簡から窺うかぎり、最初のユマニストという評価は割引して考える必要がある」と月村辰雄はジャンについて述べている²²⁾。

日常的にラテン語を使用しているジャンが小論をフランス語で発表したのは、多くの読者とりわけ王侯貴族から賛同を獲得するためか、あるいはラテン語にそれほど堪能ではないクリスチヌを意識したためと考えられる。しかし試みはうまくいかず、仲間の救援を請うたり、敵対者たちを誹謗することで論争を長期化させることになった。『薔薇物語』論争は二派に分かれた論争と言われるが、最初に「党派化」したのは擁護派のジャンである。

ただしジャンは巷で思われているような女性蔑視者ではなかったことは

付け加えておきたい。彼はゴンチエ・コル宛の書簡の中でコルの妻に成り代わって女性側の不満を滔々と述べてみたり、すべての女性を敬い讃えるための「愛の宮廷」に参加したりしている²³⁾。当時の文学サロンの中心人物である女性王侯貴族に阿る意味でも露骨な女性蔑視の実行は困難だっただろう（だからこそ百年前の男に託したとも言える）。どちらかといえば、ホモソーシャリティの中で呻吟し、過剰適応のあまり疲弊するような類型だったのではないだろうか。

ジャンに対するクリスチーナの反論

ジャンは問題の小論の一部をクリスチーナにも1401年5月頃に送っており、それに対して彼女は6、7月頃にフランス語で返信している。イッククス版では11頁を超える長い書簡である。彼女の亡き夫エチエンヌ・カステルも国王秘書官であったのでジャンとクリスチーナは面識程度はあったと考えられる。この時期彼女は「最初的女性職業作家」として王侯貴族の庇護を受けながら多くの著作を発表していたので、彼女を小論の送付対象とすることはさほど不自然なことではなかったと思われる。

クリスチーナは『薔薇物語』の文体や修辞を一定程度評価するものの、下記の点に問題があると指摘する。「性器」の語が多用されること、〈理性〉が「欺かれるより欺くこと」を推奨していること、〈嫉妬深い夫〉や〈老婆〉による女性蔑視の数々、〈ゲニウス〉が生殖を勧める卑猥な部分、「薔薇を摘む」という結論部分の恥ずかしさなどだ。本稿ではその詳細に立ち入ることはしないが、代わりに書簡冒頭の文章を観察してみよう。

書簡 [V] [ジャンの小論に対するクリスチーナの返信]

国王陛下秘書官、極めて有能かつ博識のジャン・ジョアネス殿、

敬意と名誉をもってご挨拶申し上げます。品行方正で、好奇心旺盛で、博識かつ修辞に長けた、いとも気高い殿にして師、リルの司教聖堂参事会頭よ、私、悟性乏しく軽佻浮薄な女クリスチーナ・ド・ビザンより、本件につきましてどうか貴殿の叡智が我が条理の至らなさを蔑することなく、むしろ私の女の弱さを慮って補ってくださいように、立派な修辞ともっともらしい条理で著されたお手元の小論を私にお送りくださいましたことにお礼を申し上げます（それは『薔薇物語』なる著作の数か所を批判する方々を非難し、同書を強く擁護し、作品と両著者とりわけ〔ジャン・ド・〕マンを評価するご趣旨のお書き物とお見受けします）。私は貴殿の小論を拝読して熟考し、能力の拙いなりにそ

の趣旨を理解いたしました——それは私に宛てられたものでも、私に回答を
求めるものでもないにもかかわらず、私の意見は貴殿のお書き物には相反して
おり、むしろご書簡の名宛人である高僧のご意見に同意するもので、そうした
意見に突き動かされ——、私見では、有益な書というよりは閑暇の所産と呼ぶ
にふさわしいこの作品を貴殿が褒めちぎるのは大いに間違っており、何ら謂れ
のないことであると、貴殿に敬意を表しつつ、お伝えし、明言し、公に主張し
たいと存じます。貴殿が彼の敵対者たちを非難し、「別の文書が言うことを鵜
呑みにするのは由々しきことである。彼は大いに検証して長大な作品を制作し
た²⁴⁾」などと書かれているとはいえ、私がひとえに自惚れの気持ちから、こ
れほど高名でこれほど優れた作家を咎めたり非難したりするとは思われませ
んように。しかしながら、私には堅固で強い意見があり、それが同書の中の複数
箇所²⁵⁾に反発を感じさせるのです。——実際、意見として言われたのであって、
法として命じられたのではない事柄は、批判されても差し支えないこと
です。私には学がなく、(立派な雄弁と洗練された語彙で我が条理に彩りを添え
るような凝った文体も使いこなせませんが、粗削りな俗語で実際に思うところ
を述べましょう、典雅な言葉できれいに言い表すことなどでできませんから。

ところでなぜ先ほど私は「閑暇の所産と呼ぶにふさわしい」と申し上げたの
でしょうか。確かに、利点のないものは全て、たとえ——大いなる手間暇かけ
て——扱われ、制作され、完成されたものだとしても、悪を伴う以上、暇つぶ
しましたは暇つぶし以下と呼ばれうるからです。当該の物語の高い知名度のため
にかなり以前から同書を見たいと思っていましたし、知識を得て秀逸ぶりが多
少なりともわかるようになってからは、それを読んであらゆる面から考察し、
出来る限り理解しようとしたしました (Hicks, pp. 11-13)。

まずは丁重で慇懃無礼な文体が目につく。また「悟性乏しく軽佻浮薄な
女」(femme ignorant d'entendement et de sentiment legier)、「女の弱さ」
(ma femmenine foiblece) など〈女〉である自分を低めて、下の立場から
敬意を表している。それでいて『薔薇物語』を敢然と批判することで、「自
分のような劣った者ですら明確に同書の欠点がわかるのに、一方あなたは
…」という皮肉に満ちた含蓄を含むことになる。ジャンの小論のことは
「立派な修辞ともしっかりとした条理で著された […] 小論」(un petit
traictié ordonné par belle rethorique et voirsemblables raisons) と呼ぶが、「真
実の」vraiではなくて「もしっかりとした」voirsemblablesの語を使うことで、
見せかけの立論であることを暗示している。そして早くも冒頭で『薔薇物

語』は「有益な書というよりは閑暇の所産」(droicte oysiveté que œuvre utile)と言い切って結論を出している。

彼女の評価基準は書物の及ぼす影響である。道徳的な本は有益であり、不道徳な本は有害かつ不要である。卑猥な内容はそもそも書く必要がないし、読者に不道徳をもたらすならば有害である。『薔薇物語』は「利点がなく」(sans preu), 「悪を伴う」(mal en ensuit) 本でしかない。

また「自惚れの気持ちから」以降の文からわかる通り、作家本人ではなくて、本の内容の一部の批判であることを彼女は明確にしている。これはジャンがJ・ド・マンという人物それ自体を礼讃しているのと対照的である。「意見として言われたのであって、法として命じられたのではない事柄は、正当に批判されても差し支えないことです」(chose qui est dicte par oppinion et non de loy commandee se puet redarguer sans prejudice) は、『薔薇物語』はあくまで個人の意見として書かれたものにすぎないので批判されてもよいという趣旨だ。著者の批判それ自体を許さないジャンの偏狭な姿勢を批判するとともに、グリーンが言うように、これによってジャンがJ・ド・マンを権威化することを封じている²⁵⁾。しかしながら「部分」に限定した彼女の慎重な論調も、擁護派から見れば細部を論うばかりで「全体」や大局が見えていない、というこれまたジェンダー的の偏見とも取れるような批判の材料になってしまう。

書簡の終わり近くでは彼女は次のように書いている。

結論として、敬意をこめて申し上げますが、これほど同書を賞賛して高評するあまり、他のすべての書物をあえて低めんとするかのような、かくも親愛なる貴殿、そして貴殿のお仲間や共謀者の方々よ、同書は賞賛されるに値しません。そして価値ある諸書に対して大いなる過ちを犯されています。というのも有用性がなく、一般的または固有の善を欠いた作品は——たとえ手間暇かけて作られた楽しい作品であっても——、賞賛すべきではないからです (Hicks, p. 21).

『薔薇物語』を礼讃すると他の書物の評価が相対的に下がるという発想は、書物の絶対数が少ない時代ならではの感覚かもしれない。重要なのは、ジャンにせよクリスチヌにせよ、自分たちは文学作品の価値づけを通してフランスの文化形成と社会の啓蒙を担っているという強い自覚と責任感である。従ってクリスチヌが「女性の名誉の擁護²⁶⁾」のために敢然と論

争を開始したとか、あるいは卑猥な『薔薇物語』を読んで立腹したからだといった解釈は必ずしも妥当ではない。そうした発想は彼女を〈女〉として矮小化するだけだ。立腹したならばそれは同業者ジャンに対してであり、文芸評論家としての彼の仕事ぶりが許せなかったからだろう。初期書簡では彼女は女性を代表していない。そのことは次の個所からもわかる。

親愛なる殿よ、私が女であることを言い訳にしてこれらの弁論を行ったり行ったりしていると思わないでいただきたいし、他の方にも思われたくありません。と申しますのも、本当に私の動機はただ単に純粋な真実を主張することでしかなく、それは私が否定した例の事柄とは真逆であるということを確認な知識として知っているからです。かつ、実際に女であるために、この部分については、その経験もなく、憶測や当てずっぽうで語る者よりはより良く証言することができます (Hicks, p. 19)。

「女だから」女を弁護するとか、男に反論するとかいった構図を最も望んでいないのはクリスチーナ自身だった。性別を超えて、社会に有用な普遍的価値の形成を目指していたからだ。弁論においては女としてではなくて理性や叡智として真実を語る。文学作品においては当事者として証言する。その使い分けは明確だ。世間の詩や小説の多くは〈女〉について語るが、女という経験をもたない男が語っても「憶測や当てずっぽうで語る」(parle par devinailles et d'aventure) だけだ。それは不正確であるだけでなく、上述のようにおのずから理想化または蔑視の両極端に偏ってしまう。〈他者〉を語る、あるいは、〈他者〉の代わりに語ることの難しさは1988年のスピヴァクの『サバルタンは語ることができるか』が問題提起したが、すでにクリスチーナはそれに気づいていた。だからこそ当事者による語りが重要なのだと、彼女は考える。実際彼女の描く抒情詩は、結婚の甘美さや寡婦の孤独など自身の実体験に基づいた秀逸な作品に満ち溢れている²⁷⁾。

J・ド・マンは、本来普遍的な価値をもって人間を導くべき〈理性〉に、小娘をかどわかすための些末な入れ知恵や「騙されるより騙せ」といった非道徳的な言辞を吐かせている。ところが国王秘書官の男たちはそういう本末転倒の作家を反権力や自由の名において面白半分にに担ぎ出し、権威化してしまう。ホモソーシャルな集団が「普遍」を奪取し、占有していくことへの危機感こそが、クリスチーナの論戦への参加の原動力だったのでは

ないだろうか。

この後J・ジェルソンやコル兄弟が登場し、論争は複雑化あるいは泥沼化してゆく。とりわけゴンチエはクリスチーナに対して侮辱的な文言をぶつけ、二人の間で熾烈なやり取りが交わされる。なお1402年2月に彼女は王妃イザボー・ド・バヴィエールに一件の報告を行う。女性である王妃を味方につけるために、この書簡では女性全体の名誉の擁護を前面に出しているが、やはり文筆のあり方についての問題意識が読みとれる。

真実に敵う弁論によって、〔女性の〕名誉に反する諸意見に対して対抗し、(多くの聖職者や他の者たちが文筆によって穢そうとした——そしてそれは許されることでも、我慢したり耐えたりできることでもありません——) 女性の名誉や評判を擁護することに、微力ながら努めさせていただきたいと存じます (Hicks, pp. 5-6).

聖俗の文化人たちが筆を用いて女性を傷つけることは「許されない」(qui n'est chose loisible) と強い口調で語り、文学とは〈他者〉を傷つけたり、〈他者〉を歪めて語ることではないこと、また〈他者〉の側もそれに忍従してはならないことを明確に主張している。ここで読み取れるのは文学の役割についての明敏な意識であり、だからこそ彼女は文壇の覇権を巡って論争に関与したのだろう。

論争当事者たちの生の証言に触れるために、本稿ではあえてラテン語やフランス語の一次資料にあたって読解を行った。今回取り上げたのは膨大な論争資料のほんの一部であり、偏りや不十分な点があることは承知しているが、論争初期の論者たちの意識や彼らの知的空間の雰囲気になんらかの光を当てることができたら幸いである。

注

- 1) Guillaume de Lorris / Jean de Meun, *Le Roman de la Rose*, 1-3, éd. F. Lecoy, Champion, 1965-1970 ; ギヨーム・ド・ロリス/ジャン・ド・マン『薔薇物語』篠田勝英訳、平凡社、1996。
- 2) Eric Hicks, *Le débat sur le Roman de la Rose*, Slatkine, 1996 [1977] ; Alfred Coville, *Gontier et Pierre Col et l'Humanisme en France au temps de Charles VI*, Slatkine, 1977 ; Virginie Greene, *Le débat sur le Roman de la Rose*, Champion, 2006 ; J. L. Baird / J. R. Kane, *La querelle de la rose* :

- Letters and Documents*, Chapel Hill, Univ. of North Carolina Press, 1978.
- 3) Cf. Fabienne Pomel, « Christine de Pizan, *Le Livre des epistres du debat sus le Romant de la Rose* », *Perspectives médiévales*, 37, 2016, édition électronique.
 - 4) Greene, *op.cit.*, p. 15sq.
 - 5) ホイジンガ『中世の秋』堀越孝一訳, 中央公論社, 1979年, p. 237 (VIII「愛の様式化」が『薔薇物語』論争を詳述している)。
 - 6) André Combes, *Jean de Montreuil et le chancelier Gerson*, Vrin, 1942.
 - 7) D. W. Robertson, *A Preface to Chaucer: Studies in Medieval Perspectives*, Princeton Univ. Press, 1962, p. 364.
 - 8) Greene, *op.cit.*, p. 24.
 - 9) 月村辰雄「摘まれなかったバラ：『バラ物語』論争と擁護派の論旨について」『仏語仏文学研究 5』（東京大学仏語仏文学研究会），1990年，pp. 13-44；木間瀬精三「クリスティーヌ＝ド＝ピザンと「ばら物語論争」」『聖心女子大学論叢 11』1958年，pp. 36-71；篠田勝英「3『薔薇物語』論争」（原野昇編『フランス中世文学を学ぶ人のために』世界思想社，2007年所収）pp. 123-25 など。
 - 10) 木間瀬，上掲論文，「真に女らしい優しい心をもって唱い上げた数々の愛の詩」（p. 50），「これ程純粋に女の心を歌った詩人は，いつの時代にあっても少ないのではなからうか」（p. 69）など。
 - 11) 篠田，上掲書，p. 206.
 - 12) 木間瀬，上掲論文，p. 48.
 - 13) Ch. F. Ward, M. Potansky など. なお同作の執筆を 1401 年と見なす場合もある。
 - 14) Ovid, *L'art d'aimer*, éd. H. Bornecque, Belles lettres, 1967；オウイディウス『恋愛指南—アルス・アマトリア』沓掛良彦訳，岩波文庫，2008年。
 - 15) Christine de Pisan, *Œuvres poétiques II*, éd. M. Roy, SATF, 1886.
 - 16) Hicks, *op.cit.*, p. XXIX.
 - 17) 本来全員をファーストネームで表記すべきだが，本論争には多数の「ジャン」が登場して紛らわしいため，ジャン・ド・モントルイユを原則「ジャン」と表記し，その他のジャンは「J・」で表記する。
 - 18) Hicks, *op.cit.*, p. LII.
 - 19) Baird, *op.cit.*, p. 30. 日本ではホイジンガの和訳から論争の文言が引かれることが多いので注意が必要である。
 - 20) イヴ・K. セジウィック『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』上原早苗，亀澤美由紀訳，名古屋大学出版会，2001年，参照。
 - 21) 「我々の仕事を超越することや反することを行って誹りを受けることは望みま

せんが」[103] 参照。厳密な文脈は不明だが、秘書官業務等を指すであろう「我々の仕事」(officium nostrum)への言及があるのは、男にとっての「仕事」と「女」の二項対立において、ときには仕事に対するリスクを冒してでも「女」に興じることが「男らしい」、という発想があると解釈することが可能だ。

- 22) 月村, 上掲論文, p. 15.
- 23) Marcelin Defourneaux, *La vie quotidienne au temps de Jeanne d'Arc*, Hachette, 1952, pp. 141-46, 157-58.
- 24) 「 」内はジャンの小論からの引用と思われるが、唐突に登場し、前後の文脈が不明で訳出困難であることをグリーンが指摘。Cf. Greene, p. 59.
- 25) *Ibid.*, p. 59.
- 26) 木間瀬, 上掲論文, p. 53.
- 27) 『詩人クリスティーヌ・ド・ピザン』沓掛良彦／横山安由美訳, 思想社, 2018年.